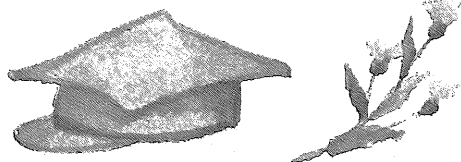


大学入試の歴史 (第39回)

予備校の歴史(3) — 予備校の起源ア・ラ・カルト —



名古屋大学教育学部教授
佐々木 享

本格派予備校時代の開幕

私立大学附設の予備校が廃止されて以後の予備校は、それまでのいわば専門学校や中学校に寄生した学校ではなく、独自の校舎をもつ学校が主体となっていく（もちろんその後も、講師陣には専任者のみでなく、多数の官公私立学校の教師が動員されていた）。

1900年代に誕生した浪人相手の予備校を今日の予備校の原型とみる研究者が少なくないなかで、新村が第1次大戦後を画期としたのは、他の学校に寄生せずに、独自の校舎をもつ予備校が主流となってきたことに注目したのかも知れない。

大学教授が兼業で始めた駿台高等予備学校

明治大学教授山崎寿春が、「駿台高等予備校」の名で各種学校の認可を受けたのは、1930（昭和5）年だった（『駿河台学園七十年史』1988年）。山崎は鳥取県尋常中学校を経て東京外国語学校英文科を卒業、4年間ほど商業学校や私立中学校の教師をした後にアメリカに留学、アマスト大学、ハーバード大学を経てエール大学でマスター・オブ・アーツの学位を取得して1910年に帰国、翌年より明治大学に迎えられて英文

学を講じた。その傍ら、明治大学が併設していた明治高等予備校で受験指導をも担当したことが自ら予備校を開設する道の始まりであった。

山崎は1916（大正5）年には月刊誌『受験英語』を発刊、1918年には高等受験講習会、1921年には冬期英語講習会を開いている。1923年からは継続的に高等受験講習会を実施し、1927年には大日本国民中学会の教室を借りて駿台高等予備学校を開設した。明治高等予備校が廃止されたので、明大教授を続けたまま予備校を自らの事業とするに至ったのである。1930年に「駿台高等予備校」として認可されたことは前述した。1940年に初めて自前の校舎で授業を始めた。この年に明治大学を退職したので、山崎の駿台高等予備校は名実ともに自立した。

今日の駿台予備学校が近代日本最初の本格的な予備校といわれる私立大学附設の予備校のなかから誕生したことは興味深い。

官立高商教授が始めた予備校——河合塾

全国にわたる学校網をもついわゆる大手予備校の本拠が大い東京にあるなかで、河合塾は名古屋を本拠地に行っている。

河合塾の歴史は、1933（昭和8）年に始まる。創設者の河合逸治（1886-1964）は、豊橋尋常中

学校時習館、第七高等学校造士館を経て1911年に東京帝大文科大学英吉利文学科を卒業、一時大学院に在籍したが1914年から20年まで第五高等学校教授となった。20年から21年まで欧米に留学、帰国すると、開設早々の名古屋高等商業学校教授となり英語を担当した。1933年に退職、同年11月に名古屋市昭和区に河合英学塾を開設した。ときに逸治47歳であった。

明大教授から予備校経営者に転じた山崎寿春におとらず、働きざかりの官立高商教授が職を投げうって塾の経営を始めた河合の経歴も異彩をはなっている。その動機は必ずしもはっきりしないけれども、1923年（大正12）年に中京商業学校を創設した梅村清光が翌年に開設した中京高等予備校で数年間英語を教えた経験があったといわれるので、この経験が動機の一つになっていたのかも知れない。自立するまえに予備校教師の経験をもっていた点も駿台の山崎と共通していた。

塾生総数48人から始まった河合英学塾は人気を博してたちまち200人を超えるに至った。受験生の要望に応じて開講科目に数学、国語および漢文もくわえて内容を充実させるとともに、1937年には校舎を新築して「河合塾」と改称し、予備校としての体制を整備した（『河合塾五十年史』1985年）。

白線浪人のための帝大受験予備校

予備校は、これまでのべてきたように、主要には中等学校卒業者に高校・専門学校への受験準備を施す学校として発達してきた。しかし、本連載第5回にのべたように、高校を卒業しても帝大に入学できないいわゆる白線浪人が激増したため、昭和期に入ると白線浪人を対象とした帝大受験者向きの予備校も叢生した。1930年

代の『帝国大学新聞』を見ていると、帝大受験生対象の予備校はかなりの数にのぼっていたことがわかる。河合英学塾（のちの河合塾）も、地元には第八高等学校や名古屋高等商業学校があったこともあり、帝大受験者を対象としてはじめられたのであった（『河合塾五十年史』8頁）。

女子のための予備校もあった

「郷里の長野県立飯田高等女学校（現在の風越高校）を昭和9年に卒業してのち、東京女高師をめざして東京渋谷の道玄坂にあった予備校に通った。当時の高等女学校には4年制と5年制とがあったが、飯田高女は4年制であった。予備校には地方の4年制出身者が多かった。そして〔翌年〕女高師に入学出来たとき、予備校時代に机を並べていた仲間が多いのに驚いた」と林雅子は書いている（林雅子先生退官記念会編『みがかずば——大塚学舎での半世紀』1983年、8頁）。ここでいわれている予備校は、1936年に開校し、女子だけを入学させていた昭栄学園をさしている。

戦後の現在では女子が予備校に通っても違和感はないけれども、戦前にあっては女子を入学させた官立高等教育機関は東京・奈良の女高師と東京音楽学校だけであったし、予備校を経てまで上級学校進学を希望する女子は多くはなかったから、女子のための予備校が存立したことについては若干の説明が必要である。

高等女学校は、1920（大正9）年以降、修業年限を5年または4年とし、法制上は5年を本旨としていた。しかし実体としては従前どおりの4年制高女が多く、5年制の高女は4年課程併置校をふくめても、1920年の21.6%から1941年の30.9%まで伸びたに過ぎなかった。生徒数

の比率もほぼ同様に推移した。ところが、東京・奈良の両女高師をはじめ、東京女子大学、日本女子大学校、東京女子医専をふくむ女子専門学校は、入学資格としては4年制高女卒と5年制高女卒とを同等に扱っていた。林の回顧にあるように、4年制高女卒業者が予備校を経て女高師に入学するという経路の背景には、この高等女学校制度の不自然さがあった。ただし、昭栄学園に学んだ者には4年制高女卒者が多かったとはいえ、5年制高女卒者もいたことはもちろんである（朴木佳緒留「民主的家庭科教育を求めて——和田典子先生の足跡にそって」『家庭科研究』第77号、1991年5月）。

1932年以前の夜間中学は専検予備校

戦前の高校・専門学校の入学資格は、基本的には中学校、高等女学校または甲種実業学校を卒業していることだった。このような学歴を持たない者が進学をめざす場合には、専検（専門学校入学資格検定試験）あるいは高検（高等学校高等科入学資格試験）に合格しなくてはならなかった。しかし、全くの独学で専検あるいは高検に合格することは容易ではなかった。1920年代にふえ始めたといわれる夜間中学、夜間高女は（本連載第31回参照）、この点で、専検や高検合格をめざす人びとの予備校として機能していたといえる。

1932年からは夜間中学、夜間高女にも専検の無試験検定が適用されるようになったので、以後、この指定を受け夜間中学、夜間高女は高校、専門学校進学のための正規の階段の一つとなった。

正規の学校に設けられた進学準備課程

——中学校補習科(1)

ところで、旧学制のもとでは、いわゆる正規

の学校のなかに予備校に準ずる課程が置かれていた。通例の教育史の書物に記載されることは減多にないので、ややくわしくふれておく。

中学校令（1899年）は中学校の体制を整備し、これを中等教育機関のいわば本流として位置づけた。中学校それ自身が「高等普通教育」の名のもとに上級学校進学のための階梯とされたことはよく知られている。この中学校には、修業年限「一箇年以内ノ補習科ヲ置クコトヲ得」とされていた（中学校令第9条）。都会地のいわゆる一流中学校に設けられたこの補習科は、ある時期までは、正規の学校教育という枠組みのなかでの進学準備課程として機能していた。

1921（大正10）年に高等学校が一斉に学年4月始期制に転換する以前においては、中学校卒業（3月）と高校入試（6～7月）の間には若干の間隙があった。中学校卒業生がこの期間を受験準備にあてたことはいうまでもなく、補習科はそのための教育施設として機能していた

表1 中学校補習科の入学者・生徒数
・学級数(1903～1920)

年 度	入学者	生徒数	学級数
1903 (M36)	1,291	473	23
1904 (37)	1,510	986	70
1905 (38)	2,864	508	37
1906 (39)	2,873	315	45
1907 (40)	2,119	594	47
1908 (41)	1,948	269	46
1909 (42)	1,618	288	41
1910 (43)	2,024	408	40
1911 (44)	2,211	419	40
1912 (45)	2,105	306	19
1913 (T 2)	1,978	179	18
1914 (3)	1,556	46	8
1915 (4)	1,406	140	8
1916 (5)	1,111	213	9
1917 (6)	973	247	15
1918 (7)	929	124	17
1919 (8)	679	111	8
1920 (9)	581	45	6

1. 生徒数は、各年10月1日現在である。
各年の『全国中学校ニ関スル諸調査』による。

わけである。

表1は、毎年の『全国中学校ニ関スル諸調査』から、補習科の入学数、10月1日現在の在籍者数を抜きだしたものである。たとえば1909年度の補習科入学者1,618名は、前年度の卒業生14,741名の約11%であった。1909年に補習科を開設していたのは45校(46学級)であったから、補習科を活用する者は多かったといえる。他方、入学者数に対して10月1日現在の生徒数が極端に減少している(たとえば1909年のそれは288名で、入学者の17.8%であった)。この減少は、上級学校入学者によるものと推測され、この課程が進学準備課程であったことを示唆している*。ただし、表1にみるように、補習科を置く中学校はごく少数であり、補習科の全くない県も少なくなかった(補習科を2学級開設する学校はまれであったから、表1の学級数は学校数に近いと考えてよい)。

*『文部省年報』に記載された補習科についての統計は、1900年代を例にとると表2の如くで、毎年の補習科入学者は『全国中学校ニ関スル諸調査』が掲げるそれよりはるかに多い。例えば1909年度の補習科入学者は3,259名であり、これは前年度の卒業生13,657名のじつに23.9%に相当した。しかしこの『文部省年報』の数値には補習科卒業生数が生徒数を上まわるという矛盾が多いほか、学級数を知り得ないうらみがあるので、ここでは『全国中学校ニ関スル諸調査』(大空社から全冊が復刻されている)の数値をとった。

表2 『文部省年報』による中学校補習科の入学者・生徒数・卒業生(1903~1909)

年 度	入学者	生徒数	卒業生
1903 (M36)	3,810	1,288	1,380
1904 (37)	4,974	829	1,566
1905 (38)	5,359	1,328	749
1906 (39)	6,006	980	895
1907 (40)	4,344	616	603
1908 (41)	3,249	340	345
1909 (42)	3,259	320	371

正規の学校に設けられた予備校

——中学校補習科(2)

1921年に高等学校が一斉に学年4月始期制に転換すると、中学校卒業(3月)と高校入学(4月)とは直接につながったから、中学校補習科の役割は変化した。すなわち、補習科は中学校卒業後いわゆる浪人となった者が入学する課程となった。表3にみるように、かつてとは違って入学者数と10月1日現在の生徒数との間に大きな差がなくなったことが、以上の事情を示唆している。大正期の一時期減少した補習科(学級数、入学者数)が30年代に入って増加したことは、いわゆる受験戦争の激化を反映しているとみてよいであろう。

なお、表にはしめしていないけれども、概して私立中学校の補習科は少なかった。そして1920

表3 中学校補習科の入学者・生徒数・学級数(1921~1940)

年度	入学者	生徒数	学級数
1921 (T10)	392	253	14
1923 (12)	558	495	10
1924 (13)	543	455	9
1925 (14)	704	561	11
1926 (15)	657	628	11
1927 (S 2)	612	572	10
1928 (3)	718	746	13
1929 (4)	1,163	1,022	19
1930 (5)	1,196	1,028	21
1931 (6)	1,033	929	22
1932 (7)	1,033	947	21
1933 (8)	919	1,435	27
1934 (9)	1,365	1,248	26
1935 (10)	1,740	1,542	33
1936 (11)	1,818	1,575	35
1937 (12)	1,697	1,888	45
1938 (13)	2,167	1,988	43
1940 (15)	2,016	2,542	44

1. 生徒数は、各年10月1日現在である。
 2. 生徒数が入学者を上まわる年があるけれども、原表のままとした。
- 各年の『全国中学校ニ関スル諸調査』による。

年代には補習科を置く私立中学校が減少してゼロとなった年もあった。私立学校にあっては、補習科を中学校から切り離して予備校として独立させた例もあり、中学校と予備校とは機能分担するようになったといえよう。

補習科は、公立中学校にあっては、毎年継続的に開設されていたわけではない。ほとんど毎年開設していた中学校としては、東京府立一中、県立千葉中、広島県立一中、県立済々黉、県立熊本中、県立鹿児島一中などがあった。なお、1920年以降になると、関東以北で補習科を開設する中学校はほとんどなかった。

官公立の予備校は知られていない。しかし公立中学校補習科は、公立の、いわば正規の学校に設けられた予備校課程であった。

補習科のない高校の場合

新学制の高校には、本科のほかに別科、専攻科を設けることはできるけれども、補習科の制度はない。浪人は、独習するか、予備校や塾で勉強するほかないわけである。こうしたなかで、一時期、都会地のいわゆる有名受験校が浪人対象の補習科をもぐりで設けた事例があった。周囲の批判を浴びて以来、こうしたもぐりの補習科は廃止された場合が多かったけれども、なかには本体と分離して同窓会あるいは別法人による予備校を設立した事例も知られている。このほか、ほんの一部ではあるけれども、専攻科を実質的に予備校としている公立高校もある。